政大日本研究【第九號】
2012 年 1 月，頁 83~104

判斷動詞“～視する”之研究

蘇文郎*

摘要

本論文作為引用表達法研究的一環，從型態、語義、構文論的觀點探討判斷動詞“視する”的特徵及用法。探討的重點分下列 4 點：

1）複合動詞「～視する」的語彙結構及意義特徵
2）「～視する」在字典、報紙及網路文章上的使用分布和生產性
3）以「～視する」為述語的句子所要求的格體制
4）日漢語的對應關係

關鍵詞：～視 *suru*、複合動詞、引用表達法、判斷內容、內容詞併入

* 政治大學日本語文學系　教授

An Analysis of the Judge-Verb "~*Si* suru" in Japanese

Soo, Wen-Lang*

Abstract

The aim of this study attempts to analysis the judge-verd ~*Si suru* ("regard / look upon X") from the viewpoint of morphology, semantics and syntax. The main discussion includes:

1) The morphological structure and the special meaning of such category
2) The productivity and distribution of "~*Si suru*" in newspaper and webside article
3) The case structure about "~*Si suru*"
4) The correspondence on "~*Si*" between Japanese and Chinese

I firmly believe the conclusions resulting from this study will be able to make some contributions to theory/application in contrastive analysis between Japanese and Chinese, and even to the strategies of second language teaching.

Keywords: *Si* suru, judge- verb, compound-verd, case structure, incorporation, correspondence

* Professor, National Chengchi University Department of Japanese

判断動詞“～視する”についての一考察

蘇文郎*

要旨

本稿では引用表現の研究の一環として、もう一つの形式“～視する”を形態的、意味的、構文論的観点から考察する。手順として次のようになる。

1)「～視する」の語構成及び意味を考える
2) 辞書や新聞などに見られる「～視する」の使用分布及び生産性を論じる
3) 新聞記事やウエブサイトからあつめた例をもとに複合動詞「～視する」のとる文型を整理する
4) 日中語の対応関係

キーワード：～視する、複合動詞、引用表現、判断内容、内容語編入

* 政治大学日本語文学科　教授

判断動詞「～視する」についての一考察

1. はじめに

1.1. 本稿の背景

筆者はこれまで、日本語の引用表現の構文形式を、述語動詞が表す意味によって、「発話」と「思考」の 2 系統に分けて、そしてその必須成分として要求される引用成分（内容語）の形態によってさらに 7 つのタイプ[1]に分類し、形態、統語、意味の 3 つの側面から詳しい考察を行った。その中で、思考・判断動詞が要求する内容語の表現形式の多岐さに気付き、蘇（1997）（2005）で、「～と」だけに止まらず、「形容詞（形容動詞も含む）の連用形」「＜名詞＞ト/ニ」「＜形容詞的動詞＞テ」「ヨウニ（ト）」などの表現形式も「引用」の問題として論及がなされ、かなり具体的な成果を上げることができた。その後思考・判断動詞の引用成分について新たに加えるべきことも発見された故、ここに改めて取り上げることにする次第である。

1.2. 考察対象

本稿は次の 1～9 の例文に示されているような、内容語編入の思考・判断複合動詞「～視する」を研究の対象とし、その形態、意味や機能について論考していく。

---

[1] 日本語の引用表現の構文形式にはさまざまなものがある。従来認められてきたものや、認めうるものを形態の上から列挙すると以下のようになる。Ⅰ Ｘが＋［　］ト＋発話、思考動詞（言う、述べる、思う、信じるなど）　Ⅱ Ｘが＋Ｙに＋［　］ト＋伝達動詞（伝える、言いつける、訴えるなど）　Ⅲ Ｘが＋Ｙに＋［　］ヨウ（ニ（ト））＋命令、勧告動詞（命令する、勧めるなど）　Ⅳ Ｘには＋［　］ト／ク／ニ＋（自発）思考、感覚、認知動詞（思われる、思える、感じられるなど）　Ⅴ ［～が（形容詞的動詞)］テ＋見える／感じられる／聞こえる　Ⅵ Ｘが＋Ｚを＋［　］ト／ク／ニ＋感情、知覚、評価動詞（思う、感じる、見るなど）　Ⅶ Ｘが＋（Ｙに）…コト／ノヲ＋発話、伝達、認識動詞（伝える、感じる、発見するなど）

1、スンニは「選挙」で選んだが、シーアは「血統」を優先して預言者の子孫をイマームと呼び神聖視する。

2、目下の時代を、ただただ失う時代ととらえ絶望視する向きもあるようだ。

3、「バナナの話は東の人間を単純視する材料だった」と言う。

4、堀田秀吾・明治大准教授（法言語学）らが、日弁連の依頼で模擬裁判評議の録音録画資料を分析したところ、裁判員は証拠や検察・弁護側の主張より、証言を最重要視することが分かった。

5、法廷で瀬川が「いじめはなかった」とウソの証言をしたと、逆に糾弾する。桐山を英雄視する宮田も尻馬に乗って、瀬川を追及した。

6、出費を抑える動きを経済の専門家は「消費の落ち込み」と危険視する。

7、にもかかわらず、性をタブー視する社会の中で周囲の目を恐れ、想像を絶する苦しみを抱え込んでいる人たちが決して少なくない。

8、これまで「第１期だけで１５０ヘクタール」と報じられてきたので、地元紙は「世界最小か」とライバル視する香港ＤＬ（ホテルや駐車場などを合わせて１２６ヘクタール）より小規模になる事態を嘆く一方で、地元住民の立ち退き面積が４００ヘクタールに及ぶため「拡張工事があるはず」とも強調しています。

9、中国を有望視する理由として同氏は、今年も 7―8%の経済成長が見込まれるなど「 世界のなかでも高い成長が期待できる」ことや、世界最大の外貨準備高を保有する中国 政府が景気浮揚に向け柔軟な政策が取れることなどを挙げた。

（1～9 の用例文は毎日新聞(2007～2009 年)から取ったものである）

これらの例すべてに共通するのは基体動詞「視」そのものがなん

らかの判断作用を表す意味を本来的に持っているということである。

上記の語例に示されるように、日本語にはこのような合成語が多用され、形態的に、複合の適用レベルによって様々に分類できる。

形態論的分類というのは漢語か外来語かといった語種の問題、または熟語か、語と語との結合（つまり複合語）かといった結合タイプの問題が基準になる。そして、合成語の構成素が拘束的なもので、そのままパラフレーズ（言い換え）できないものと、構成素が自立的なもので、そのままパラフレーズできるものとに分類できる。いずれのタイプにおいても内容語が動詞の中に組み込まれている要素として可視的である。意味的にも、統語的にも分析可能である。

語彙分解に編入（incorporation）という概念を組み入れれば、日本語のこういった判断・思考動詞の複雑な意味構造にも共通の特徴が見え、特に従来の統語的分析では不問にされがちであった判断内容を表す内容述語の問題が明瞭な形で解明されてこよう。

1.3　先行研究

従来の判断思考表現の研究においては、判断内容が「～と」の形式で表されるものが数多く取り上げられているが、複合語に属する、この「～視する」の類型は、単なる一般動詞として見られてきたためか、内容語編入動詞として取り上げて、論じたものは殆ど見られなかった。

また「～視」の日中両語における対応関係を対照研究の形で論じたものも筆者の知る限り、これまで皆無のように思われる。かつてそれほど留意されなかったこの「～視する」型の複合語には、構文や意味用法特徴に無視できないものがある故、本稿では改めてこれらの問題を取り上げて論じたいと思う。

本研究の根本的な目標は内容語編入動詞の形態及び意味構造全般に対する理解を深めていく点にあるため、考察は次の事項に重点を置いて進めていく。

（ⅰ） 複合と編入における形態、統語及び意味構造

（ⅱ） 内容を表す前接要素の意味的制約

（ⅲ） 主要部右端の規則

（ⅳ） 中国語との対応関係

2.“視”の使用分布と語構成の種類

2.1. 熟語として

“視”は単独に動詞として使用できる以外に、以下のようにいろいろな語と結合してさまざまな熟語や複合語を形成する。『日本国語大辞典（小学館）』によれば「視」がつく熟語や複合語は 77 語ある[2]。

10、一字名詞+視：一視、下視、芥視、虎視、洞視、雄視、人視、仇視、環視、傍視、膛視、目視、…

一字形容詞+視：同視、軽視、細視、嫉視、熟視、正視、無視、冷視、明視、黙視、同視、短視、直視、平視、…

一字動詞+視：回視、看視、監視、睨視、坐視、巡視、省視、凝視、仰視、瞰視、検視、顧視、瞻視、諦視、注視、聴視、透視、盗視、蔑視、…

二字名詞+視：周辺視、同一視、問題視、冷眼視、白眼視、度外視、異端視、偶像視、蛇蝎視…

二字形容詞+視：過大視、重要視、直接視、等閑視、重大視、絶対視…

多字（名詞、形容詞、動詞）+視：遠邇同視、長生久視、竜躟虎視…

「視」は合成語の構成要素として活発な造語力を発揮し、現代日

[2] （10）の単語例は『日本国語大辞典（小学館）』に見出し語として登録されているものである。生理現象の視力に関するもの（17 語）を含めると全部で 77 語になる。因みに『三省堂スーパー大辞林』にはさらにこれより 10 語多く、87 語が登録されている。そして『広辞苑　五版』には 81 語が登録されている。

本語の一つの重要な複合形式をなしている。

「～視」は書き言葉として「する」を伴って「～視する」のような形に動詞化することが多く、新聞や雑誌などの文章語に多用されている。

2．2　漢語としての単純動詞“視”の意味用法

中国語の単純動詞“視”は文章語として①見る　②見なす　③取り扱う　④遇するなどの意味を表す。そして、構文的には、常に“為/如/同/若”と結合して“視～為/如/同/若～”のような迂言的な形で使われる。

11. a. 視如寇讎　→敵と同じく見る。敵視する。
b. 視如敝屣　→まるで破れ靴のごとく扱う。
c. 視若草芥　→ちりあくたのように見る。全く問題視しない。
d. 視若不見　→見て知ぬふりをする。
e. 視死如帰　→死をみること帰するが如し
f. 視同一律　→同じものと見なす。同一視する。
g. 視同路人　→路傍の人と見る。赤の他人のように遇する。
h. 視為畏途　→危ないことと見る。
i. 視為知己　→知己のように見る。親友のように遇する。
（日本語訳は『現代中国語辞典』による）

11e のように、“視”と“如”が離れていて、間に対象の目的語（死）が入っている三項述語(three-place predicate)であるのに対して、他のは“視”が判断助動詞の“為/如/同/若”を介して判断作用の働きをする。なお“視”は 11d のように自動詞としても使えるが、複合動詞の場合、普通、他動詞として使われることが多い。

2.3　「～視する」の語構成及び意味

語構成から見れば「～視する」型の複合動詞は「熟合構造」のものと、「複合構造」のものに分けられる。以下それぞれの語構成及び意味の特徴について考察する。

（ｉ）熟合構造：

(1) 並列式のもの：看視、瞻視、省視、監視、検視…

単純動詞の“視”が思考や判断を表す同義語や類義語の単純動詞と組み合わさって、並列的に作られたものである。

(2) 偏正式のもの：

A.　一視、雄視、虎視、環視…

前接要素と後接要素が合体した、あくまで一まとまりの動詞であり、別々に存在するわけではない。構成要素の意味が明確に取り出せない、言い換えれば、熟語動詞の意味を構成要素に分担させることが出来ないもので、意味的には、「単純語」に相当するものである。

B.　目視、黙視、盗視、短視、仰視…

状態や手段などの一字名詞、形容詞、動詞と組み合わさって偏正式の熟語動詞を作る。後部語根となる“視”は基本的に単純動詞“視る”の概念構造を持っている。

（ⅱ）複合構造：

(1) 内容語編入構造：

漢語系のもの

一字漢語+視：敵視、友視、奴視、仇視、人視、同視…

二字漢語+視：重要視、重大視、同一視、有力視、本命視、不安視、問題視、異端視、英雄視、罪悪視、絶望視、邪道視…

三字漢語+視：不可能視、最重要視、不可侵視、不可欠視…

四字漢字+視：仮想敵国視、性的対象視、効果疑問視

洋語系のもの：ライバル視、タブー視、アイドル視、ヒーロー視、ネガティブ視

和語系のもの：ただ乗り視

内容語（上例では「重要」「敵」「異端」…など）が複合動詞「～視する」に編入されて、「～を重要視する」「～を敵視する」「～を異端視する」全体で一つの述語句を形成しており、語彙的複合と考えてもいい語構成である。いずれのタイプにおいても内容語が複合動詞の中に組み込まれている要素として可視的である。たとえば「重要視する」は「重要と見る」と言い換えることができるから、この「重要と見る」という統語的な語結合が根底にあり、その迂言的な構造から「重要視する」という複合語が形成されるという考え方も成り立つ。そして内容語になる語は原則として名詞系と形容(動)詞系のものが主である。「視」は①見ること、②見なすことという基本義を持つ。そして思考判断の意味以外に“～と取り扱う/遇する”という意味も付与される。したがって「～視する」が持つ基本義からして、上掲諸語が表す意味はそれぞれ左端の内容語に示される通りになり、構成素がそのままパラフレーズの際に用いられる。両者は文体的差異を除けば、知的には同義と考えられる。そして、語構造では内容語と基体動詞の「視」はそれぞれ個別の語として独立性が認められる。

(2) 非内容語編入構造：環視、蔑視、熟視、黙視、白眼視、過大視、等閑視、度外視　冷眼視…

意味的に一律に「～と見る/見なす/取り扱う」と言い換えられないものである。前接語は思考・判断内容ではなく、「視」のあり方、あるものを判定する（見る）見方（判定の方法）を表しており、かなり複雑な様相を呈している[3]。これらは不規則的意味を表す複合動

[3] 回視、監視、環視、警視、嫉視、注視、透視…など、語構成が「一字漢語動詞+視」の複合動詞も数多く存在し、その前接語の漢語と「視」がいろいろな意

詞である。

複合動詞「～視する」の語構成の取り扱いにあたっては、上述したように、何と言っても複合動詞全体が規則的意味を表すものと、不規則的意味を表すものとに分けて把握することが肝要である。タイプ（ⅱ）-1 の「～視する」が表す意味を規則的意味だとすれば、タイプ（ⅱ）-2 のような不規則的な意味を表すものも数多くある。

内容語編入動詞と非内容語編入動詞との一番顕著な違いは意味の透明さという点である。前で触れたように二字音動詞「～視」は多種多様な意味関係が見られ､様々な程度に意味が熟合化されている。

なお「遠視、近視、弱視､､黄視、老視、斜視、乱視、外斜視、仮性近視…」などの「～視」は思考判断の意味はなく、動詞としての用法もなく、生理現象の視力に関する用語であるので、別扱いしなければならない。

この種の複合動詞には内容を表す付加語が前項要素として含まれているのが共通の特徴である。そして、この類型に属する複合動詞は“内容＋思考・判断”という意味関係のもとであれば、類推的に生産することが許される。この点は中国語とは対照的である。例えば､「深刻視する、本命視する、確実視する、最重要視する、有害視する、単純視する、万能視する、疑問視する、罪悪視する、絶望視する…」のような、辞典には記載されていないが用法としては容認される例は数多く見られる。このことから前記の（i）熟合構造は内容を表す前接要素が特殊化され、語彙化され、レキシコンの中にリストされている。それに対して､（ⅱ）の複合構造には必ずしもその必要がないということが言える[4]。

味関係をなしている。本稿ではこれらの複合動詞の語構成を後者、つまり非規則的意味を表すものと認める。

[4] その証拠にこのような類推的に生産できる（ⅱ）類型の複合動詞は、一般の国語辞典には記載されていないが、インターネットで検索すると、数多く出てくる。例えば、ライバル視する、犯人視する、有力視する、跨大視する、同列視する、不安視する、順当視する、特別視する... など。ここからこの類型の複合語のいかに生産性が高いかが見て取れる。

2.4　統語的及び意味的特徴

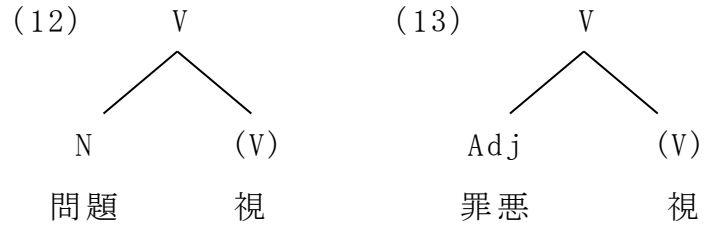
「問題視、異端視、英雄視、罪悪視、絶望視」などの内容語編入複合動詞は意味的には「問題と見る、異端と見る、英雄と見る/扱う、罪悪と見る、絶望的と見る」に示されるように、項の形を取らず、すなわち判断内容は格助詞「～と」を伴わずに、直接複合動詞の造語成分として「～視する」の中に編入されている、統語部門で作られた複合動詞と見てもよい。統語構造上、もともと二語であったものが、最終的な表層構造では一語に融合している。つまりこの類型の複合語では機能的には前置構成素が補足語として主要部（head）である判断動詞「視」を修飾する。そして、形態的には判断内容語が前接要素の形で語彙的に編入され、「内容と判断」が一語に融合されているということである。このように統語構造において複合語が作られるというのが日本語の大きな特徴である。

統語的には動詞「スル」はほとんど固有の意味を持たない軽動詞となり、構文の主な意味はこの複合語によって規定される。

なお、このタイプの語構成は類推的に生産することが許され、レキシコンにリストされる必要はないという点では上述した漢語系のものとよく似ている

2.5　主要部右端規則（Righthand Head Rule）

日本語の内容語編入動詞においては、すべて主要部が右側の構成素にある。これらを樹形図で示すと、12、13 になる。



二つの要素が組み合わされるとき、「右側の要素が主要部になる」

という一般法則がある。主要部（head）というのは複合語全体の統語範疇（品詞）や意味を決定する要素である。この制限は内容語編入動詞では複合語の主要部が右端に現れることを要求する。これは日本語が主要部末端言語（head-final language）という類型的特徴（typological characteristic）を備えていることによる。

因みに、中国語では「二字内容語＋視」のような三字音動詞が認められないゆえ、日本語とは対照的に主要部左端の言語で、「視為異端/看作英雄」のように思考判断を表す主動詞（下線部）を左端、そして内容語をその後ろに持ってこなければならない。下の 14 諸例は成立しない。

14、＊ 問題視/異端視/英雄視/罪悪視/絶望視

これには日中語の主要部のパラメータに関する選択上の相違がこの内容語編入の複合動詞の上にも反映されている。

3. 資料に見る「～視する」の意味用法

3.1 既成の複合動詞としての使用分布

筆者は『日本国語大辞典』、『広辞苑　第 5 版』、『三省堂スーパー大辞林』、『大辞泉』を対象にし、それぞれに登録されている「～視」の見出し語をもとに、量的側面と文法的意味側面の双方からそれぞれ特徴を調査して見た。前述した熟合構造のものと、複合構造のもの別に見てみると、どの辞書もタイプ（ⅱ）-1 の内容語編入構造のものがもっとも少ないことを示している。[5]

3.2 新聞に見る「新造」の複合動詞としての使用分布

複合構造の「～視する」型の複合動詞は生産性が高い。いちいち

[5] 『日本国語大辞典』では 77 語中の 4 語を、『広辞苑　第 5 版』では 81 語中の 7 語を、『三省堂スーパー大辞林』では 87 語中の 10 語を、『大辞泉』では 73 語中の 8 語をそれぞれ占めている。

辞書に登録する必要がない。因みに毎日新聞（2007～2009 年）から取った「～視する」が含まれる 44 個の用例（異なり語数）のうち、辞書《日本国語大辞典》に登録されているのは 13 語（下例ゴシック体で記されたもの）だけである。「～視する」を使用する表現の豊かさには日々目を見張るものがあり、データ集めに困るということは全くない。

同一視する、過大視する、度外視する、正視する、目視する、注視する、直視する、重要視する、座視する、透視する、監視する、敵視する、擬視する、ライバル視する、犯人視する、有力視する、跨大視する、同列視する、不安視する、順当視する、特別視する、絶対視する、敵対視する、深刻視する、本命視する、確実視する、最重要視する、有害視する、単純視する、万能視する、疑問視する、罪悪視する、絶望視する、当然視する、英雄視する、犯罪視する、神聖視する、邪道視する、異端視する、問題視する、困難視する、危険視する、タブー視する、ヒーロー視する

3.3　「～視する」がとる文型

以下では「～視する」複合動詞が要求する補語数や格体制を手掛かりにその構文特徴を見ていくことにする。

資料[6]から抽出した結果、「～視する」がとる構文形式は主に次の 4 種類に分けられる。

（Ⅰ）ＸがＺと～視する……二項述語
（Ⅱ）ＸがＹを～視する……二項述語
（Ⅲ）ＸがＹをＺと視する……　三項述語
（Ⅳ）ＸがＹを「Ｚ」と～視する……三項述語

[6] 用例は主に毎日新聞（2007～2009 年）及び Yahoo Japan のウエブサイトからとったものである。

3.3.1　（Ⅰ）ＸがＺと～視する

15、現議長の佐藤正昭氏は、県主導の仮設住宅の寒さ対策が後手に回ったことを挙げ「政令市の県議は市民との距離が遠いのでは」と**疑問視する**。（河北新聞社「宮城のニュース」2011）

16、原告団は、この名簿を持った建設業者が農家を回り、事業推進を個別に働き掛けていると**問題視していた**。（2008）

この構文は基本的には、“Ｘが「Z」と**疑問に思う**”や“Ｘが「Z」と**問題と見る**”と同じ意味を表しているが、両者の格体制（項構造）が違う。前者（判断動詞「見る/思う」による構文）は判断内容を、補文ともう一つの内容語つまり「疑問と」「問題だ」で表されているのに対して、後者（「疑問視する」「問題視する」による思考判断構文）は思考内容の「疑問と」「問題だ」は直接複合動詞のなかに取り込んでいることである。

3.3-2　（Ⅱ）ＸがＹを～視する

17、上司と部下がお互いを**“タダ乗り視”する**制度の欠落「評判情報」を徹底活用**する**シリコン バレーに学べ！

18、一般家庭と天皇家とを**同一視する**ことができるか？ すでに述べたように、市田 コメントは、意識的に一般家庭と天皇家とを**同一視する**ことによって、せめて天皇家の 特別扱いを薄めようとしている。
（www.geocities.jp/sazanami_tsushin/sazanami/020/04.html）

19、それはなまじ信仰に近づき、それを頭で理解しようと努める人間にたいして不寛容な宗教であり、中途半端な接近を**罪悪視する**潔癖性を含んでいる。（2007）

20、ＦＲＢは雇用統計を重視しており、市場で、利下げを確実視する見方が一気に広がった。(2007)

このタイプのものは判断思考動詞「視する」がヲ格で取り上げられた対象を、編入されている内容語によって判断思考を加える。つまり 17 は「お互いをタダ乗りとみる」、18 は「一般家庭と天皇家とを同一に見る」、19 は「中途半端な接近を罪悪と見る」、20 は「利下げを確実だと見る」という意味構造になっている。

3.3-3 （Ⅲ）ＸがＹをＺと視する

21、清の康熙、雍正、乾隆年間、また四つの碑を立て、文字がはっきり見え、関羽が曹操を辞する過程を論述している。そして「依曹已久仍帰漢、留英風　　在潁州」と彼を賛美し、高い官位と俸給を糞便と視する彼を「情深義重垂千秋、士民争拝漢雲長」とほめている。(jp.hnta.cn/Htmls/Scenic/)

このタイプのものは格支配が〔ガ、ヲ、引用のト〕で、すなわち判断思考動詞「視する」がヲ格で取り上げられた対象を内容語のＺによって判断思考を加えるという意味構造になっている。判断内容の繰出しにもなる。

3.3-4 （Ⅳ） ＸがＹを「Ｚ」と～視する

22、周囲に多くの商業施設が出店し、将来は空き店舗に悩むことになるのでは」と、駅周辺の乱開発を不安視する地元住民もいるよ。（www.sannichi.co.jp/WAKUWAKU/)

23、出費を抑える動きを経済の専門家は「消費の落ち込み」と危険視する。(2009)

24、「空き部屋が あるのに、新たな入居者を募集しない」など市の姿勢を**疑問視する**声が続出した。
（d.hatena.ne.jp/machiaruk）

上の例文 22～24 を対照しながら見ると、この種の構文は引用表現と判断表現の中間に位置するようなものであることが分かる。22、23、24 の文においては「不安視する」「危険視する」「疑問視する」などは内容語がすでに複合動詞の中に含まれており、表現内容としてはこれで十分なはずで、（Ⅱ）「ＸがＹを～視する」の構文形式をとる動詞である。一方、いずれの文にも引用成分の「Ｚ」が伴われている。それぞれの文から引用句の「「Ｚ」と」を削除すると 22´、23´、24´の文ができる。

22´駅周辺の乱開発を<u>**不安視する**</u>地元住民もいるよ。
23´経済の専門家は出費を抑える動きを<u>**危険視する**</u>。
24´市の姿勢を**疑問視する**声が続出した。

それぞれの文において、どのように「不安と思う」「危険と思う」「疑問に思う」かの内容についての情報が不足し、意味的には不完全になる。この意味不完全さは 22、23、24 の完全さとは一線を画することができる。

25、がれきの受け入れ<u>については</u>、市民から県に「受け入れないで」とする要望が約 30 件 あった一方、賛成は「ゼロ」という。 ... ただ、受け入れ表明後、市民から「受け入れて 大丈夫か」などと<u>**不安視する**</u>電話やメールが約 20 件あったという。（www.yomiuri.co.jp/e-japan/）
26、TPP <u>をめぐっては</u>議論が大きく 2 つに分かれており、「日本が TPP に参加すれば長引く 経済停滞を脱する機会になるのではないか」との意見がある一方で、「日本の農業が 壊滅的

な打撃を受けるのではないか」と不安視する人もいます。（www.mag2.com/m/0001334191.html）

27、さらに、戸別所得補償について「結局は農業を成長させることにならない。農業が産業として成り立つシステムづくりに力を注ぐべきだ」と疑問視する。（神戸新聞 2011.11.12）

25～27 の文はいずれもあるものＸが他のものＹについて、「Z」という判断作用を加えるという型の表現である。「Ｚ」は「ＸがＹを～視する」の表現と同じく判断内容を表す補文である。この種の動詞にとっては両方とも必須成分である。なお、25～27 の文ではそれぞれ“「Z」とする/している”に変えられるから、どの要素が動詞「～視する」にとって欠かせない情報であるかというと、判断内容「Z」のほうが、副詞的判断作用を表す前接語よりはるかに重要な要素のようである。因みに 25～27 の文から補文「Z と」を取り去ると下の 25´～27´のような、意味が不完全な文になる。

25´がれきの受け入れについては、市民から県に「受け入れないで」とする要望が約 30 件 あった一方、賛成は「ゼロ」という。 ... ただ、受け入れ表明後、市民から不安視する電話やメールが約 20 件あったという。

26´TPP をめぐっては議論が大きく 2 つに分かれており、「日本が TPP に参加すれば長引く 経済停滞を脱する機会になるのではないか」との意見がある一方で、不安視する人もいま

27´さらに、戸別所得補償について　疑問視する

4、統語類型論から見た日本語と中国語の「視」

4.1　主要部左端と主要部右端の制約

日本語と中国語間における統語構造論的相違については、すでに数多くの研究が発表されているので、ここでは細かい分析や論証には立ち入らず、ごく重要なポイントだけを述べることにする。

日本語と中国語の統語構造を通覧してまず目につくのは、日本が純然たる〈主要部後置型〉であるのに対して、中国語では〈主要部後置型〉と〈主要部前置型〉が混然と混じりあって存在しているという事実である。すなわち、日本語では句構造（phrase structure）の種類を問わず、主要部が句の右端に現れているのに対して、中国語ではある種の句構造では主要部が右端[7]に、ある種の句構造では左端に現れているのである。句構造を「視」の動詞句にしぼって見てみよう。

日本語ではこれらの句構造を通じて、その主要部（すなわち、動詞「視する」が右端に現れている。

一方、中国語では動詞句は原則的に主要部前置型になる。

4.2　意味の透明性

日本語のような、右側主要部構造は内部の意味関係が透明で、規則的で生産性が高く、また依存部（非主要部）は「重要視する」最重要視する」「仮想敵国視する」「効果疑問視する」「実行不可能視する」のように無限に長いものに拡大する可能性がある。新しい語が作られる場合もこのパターンに従い、とりわけ複合詞の場合は、前にいろいろな詞をつけ加えて、より長い複合語を作ることができる。無限の繰り返し（recursivirity）は、規則による（rule-governedな）生産性の証であり、したがって、日本語におけるデフォールトの形態構造は右側主要部と規定できる。

「内容語＋視」タイプの複合動詞はレキシコンの中で判断内容を表す要素の意味機能が明確に表示されているから、意味の透明度は非常に高いと言える。

[7] 例えば、民主化、国際化、少子化、砂漠化…などのような、変化の意味を表す接尾辞「化」がついている派生語の場合は主要部右端である。これについては蘇（2004）で詳しい考察があるのでそれを参照されたい

4－3　中国語との対応関係

内容語編入の複合動詞において日中語の間に二つの大きな対照的特徴が見られる。その一つは日本語が主要部右端であるのに対して、中国語は主要部左端であるという点である。前述したように日本語では統語構造、形態構造ともに右側要素が主要部（Head）として機能するのが一般的原則である。「～視する」複合動詞の場合も右側主要部の規則が広く行き渡っているのに対して中国語は内容述語などを用いて迂言的に表現するということである。例えば下例のように

	〈日本語〉		〈中国語〉
28、	N_1を重要視する	←→	把N_1看得重要/重視N_1
	N_1をライバル視する	←→	把N_1看成對手/視N_1為對手
	N_1を問題視する	←→	把N_1視為問題/視N_1為問題
	N_1を当然視する	←→	把N_1視為當然/視N_1為當然
	N_1を最重要視する	←→	把N_1視為最重要/視N_1為最重要
	N_1を仮想敵国視する	←→	把N_1 視為假想敵国/視N_1 為假想敵國

日本語は主要部右端（righthand head rule）語言であるため、判断作用と判断内容の複合概念が「～視スル」型の複合動詞に融合している。それにひきかえて、中国語は動詞句が主要部左端（lefthand head rule）規則に制限されて全く違う統合構造すなわち迂言式（periphrastic）の表現形式で対応する。

日本語では、こういう複雑な述語概念は形式上は一語の動詞の中に隠されてしまっているが、中国語では目に見える単語を連ねて表出する必要がある。これらの日本語の動詞句を適切に中国語に訳すためには「視 N1 為～」「把 N1 看成～」といった表現を明示的に補う必要がある。これを逆に言えば、これに当たるような動詞の概念は日本語では複合構造に隠れているということになる。すなわち、日本語では合成的(synthetic)に一語の複合語で表現されているのが、中国語では迂言的（periphrastic）に表現されているのである。

5、終わりに

表面的に多種多様に見える日本語の内容編入動詞は形態的にも意味的にも共通した特徴を持っていることが以上の考察から明らかになった。すなわち、いずれの類型においても判断の内容として表される語が形容詞であろうと、名詞であろうと、副詞であろうと、直接その合成語（複合語）の中に組み込まれていて、形態論的な分析が可能である。なお、日本語は主要部右端言語のパラメータで、内容語編入動詞においては、主要部の位置が厳密に右端に固定される傾向が極めて強いことも、実例を通して検証した。

一方、日本語のこれらの特徴に対して、中国語は非常に対照的な形で対応している。「～視する」形式の判断複合動詞は統語構造において、日本語が合成的表現をとるのに対して、中国語は迂言的表現をとるというように日中両語は非常に規則的な異なりを見せ、主要部の位置の差と連動して、いわゆる鏡像関係（mirror image）をなしていることも解明できた。

日中両語のこういう形態的、意味的特徴の根底にある構造を認識しておくことは少なくとも実際の教育現場においては、教育者にとって必要しかも有益だと思われるし、文法研究において、判断表現及び内容語編入動詞の本質を解明する上で極めて重要だと思われる。

参考文献

石井正彦（2007）『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房

影山太郎（2009）「外心構造における意味と形態のミスマッチ」『語彙の意味と文法』由元陽子他編　くろしお出版

斎藤倫明（1992）『現代日本語の語構成論的研究－語における形と意味－』萬友社

蘇文郎（1997）「現代日本語の引用表現についての一考察」『東呉日語教育学報』20 号

蘇文郎（2004）「日本語派生動詞“化する”の研究」『東呉日語教育学報』27 号　東呉大学日本語文学系

蘇文郎（2005）「引用表現における日中両語の対応関係及び学習上の問題」『淡江日本論叢』第 13 号

湯廷池（2010）「日本語と中国語と英語－類型論の立場から－」『語言学、教育與語言語言分析下』湯廷池編著　致良出版社

丸田忠雄（2001）『語彙範疇 II　名詞、形容詞、前置詞』研究社

三原健一（2002）「言語の構造と日本語教育」『対照研究と日本語教育』国立国語研究所

森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院

辞書

『日本国語大辞典』小学館

『広辞苑　第 5 版』岩波書店

『三省堂スーパー大辞林』三省堂

『大辞泉』小学館

『現代中国語辞典』光生館